

2025年6月8日 第二礼拝 ペンテコステ

説教題「希望の日〜ペンテコステ〜」使徒言行録2章33節

主任牧師 加藤 誠

「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」(使徒言行録2:33)

ペンテコステ。それは一つになり祈っていた弟子たちに聖霊が注がれて教会が誕生した日。家の中に閉じこもり人々から身を隠していた弟子たちが、扉を開けて世界に向けて堂々とキリストを宣べ伝え始めた日。使徒言行録2章には、ペトロの力強い説教が紹介されていますが、そこには十字架の場面で主イエスのことを知らないと言って逃げてしまった男の姿はありません。「別人のように変えられたペトロ」がいます。主イエスを十字架につけて殺した人びとを前に、ペトロはイエスこそ神の救い主キリストであることを堂々と証言したのです。いったい何があったのでしょうか。

そもそもどうして彼らは一つになって祈っていたのか。使徒言行録によると復活した主イエスが弟子たちに聖書を説き明かしてくださいましたが、復活から40日目に主イエスが天に昇って行かれて、弟子たちだけが取り残されてしまった時に、彼らは一つになって祈り始めています。主イエスから「あなたがたは出かけて行って、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と言われたものの、自分の力では扉を開けて外に出ていく勇気もなく、どう語ったらよいのかわからない弟子たちは、神の助けを請うて祈るほかない、小さな弟子たちだったのです。興味深いのは、福音書には主イエスが一人で祈る場面はあるのに、弟子たちだけで祈る場面はありません。主イエスが「一緒に祈っていて欲しい」と言われたゲッセマネでも彼らは居眠りをしています。神の御旨に従う闘いが自分の祈りになっていなかったからでしょう。彼らは「主イエスが何とかしてくれる」と思って、いつも主イエスの背中の陰に隠れることが出来た。だから祈りの必要性を感じなかった。祈らなくても何となくクリスチャンで居られたのです。ところが主イエスが天に帰られて、その背中に隠れることがもう出来ない、自分の信仰が問われて初めて彼らは真剣に祈り始めたのです。それは恵みの時でした。

自らの信仰が厳しく問われ、「一人では何もできない己の小ささ」を思い知らされ一つになって祈り始めた弟子たちに、ペンテコステの日、聖霊が注がれました。三週間前に朝の祈禱会でちょうど使徒言行録2章を分かち合った時にこんなことが語られました。「弟子たちが一つになって祈ったから聖霊が注がれた」という前に、実は「主イエスが先に弟子たちのために祈って下さっていたから、弟子たちは一つになって祈ることができたのではないか」と。つまり弟子たちの祈りの前に、まず主イエスの祈りがあった。その主イエスの祈りによって弟子たちは一つとされ共に祈る者とされたということです。

十字架の後の弟子たちは一つになって祈るどころか、散り散りに消えてしまいかねないほどダメージを受け、お互いの間にも不信と亀裂が生まれていました。その彼らが祈るために一つにされる。その背後にあって実は主イエスが先に弟子たちを覚えて祈ってくださっていたことを覚えてほしいのです。その祈りはヨハネ 17 章に記されています。「真理によって彼ら（弟子たち）を聖なるものとしてください。あなたの御言葉は真理です。彼らのためにわたしは自分自身をささげます」（17～18 節）。「父よ、私たちが一つであるように、彼らも一つとしてください」（22 節）。弟子たちが祈り始める前に、弟子たちのことを最後まで愛し抜かれた主イエスが十字架にご自分をささげ、彼らが一つとされるように祈ってくださっていた。その主イエスの深い愛と祈りに支えられて、バラバラな弟子たちが一つとされて祈る者とされたのです。

聖霊が注がれる時、それは私たちの心の扉が開かれて「先立つ主イエスの祈り」に気づかされる時です。「十字架の主イエスの愛」が私たちの心に照らし出され、神の恵みの働きが「大きく」なり、私たち自身は「小さく」されます。私たちが自分の知恵や力で生きるのではなく、先立つ神の愛と祈りを受け取り歩む器に、自力ではなく他力で、神の愛を受け取り歩む器に変えられていく。それが聖霊の働きです。

ペトロは十字架で深い挫折を味わいました。最後まで主イエスに従うつもりの方が粉々に砕かれて、小さく、ただ祈るほか何もできない者とされました。ペトロに聖霊が注がれた時、彼は自分の知恵や力で歩むのではなく、十字架の主の愛と憐れみを受けとって歩む器に変えられたのです。ペンテコステ。それは弱さや不信仰を抱える私たちが、神の愛と憐みの器として新しく生き始める「希望の日」です。

今日の礼拝で三人の方の信仰告白・バプテスマの恵みにあずかることを感謝します。三人の方々に共通しているのは、子どもや少年少女の時に聖書の御言葉の種が心に蒔かれていたこと。そのあとの二十年、四十年、それぞれ聖書から離れてしまい、蒔かれた御言葉の種が眠っていたように思えた時にも、主イエスは祈り続けてくださり、今日の信仰告白に導いてくださいました。ここにも先立つ主の祈りの恵みが見えます。

バプテスマはそのキリストの十字架の死と復活の命に沈めらるること。キリストの愛、恵み、祈りの中に沈められることです。私たちはクリスチャンになったらもう罪を犯さない人に変身できるかというところではありません。私たちは本質的には罪人であることに変わりないからです。けれども、その罪人のわたしを取り囲むキリストの愛、赦し、恵みにすっぽりと包まれて歩み始める。それがバプテスマです。自力で歩むのではなく他力（神の恵み）で歩む。先立つ十字架の主の愛と祈りを受け取り、主の豊かな慈しみを証しする器とされる。この希望の歩みに招かれていることは大きな喜びです。このペンテコステ、聖霊の豊かな恵みの働きにあずかり、この世界でイエス・キリストの愛と憐れみを証しする教会として建てられていきたいのです。